熊本が生んだ 大甲の聖人 志賀哲太郎

会誌５号

【目次】

会長挨拶	---	1
資料で辿る志賀哲太郎の幼少年期（その１）	---	2
資料で辿る志賀哲太郎の幼少年期（その２）	---	5
中村家と志賀家の繋がりと哲太郎少年が受け継いだ慈悲の心	---	9
大甲の聖人　志賀哲太郎先生（その１）	---	15
大甲の聖人　志賀哲太郎先生（その２）	---	18
志賀哲太郎先生顕彰碑建立賛助者芳名録	---	21
志賀哲太郎先生生誕の地顕彰碑建立の施工にあたって	---	23

志賀哲太郎顕彰会

令和３年 11 月

【表紙写真】「**生誕の地　志賀哲太郎顕彰碑**」

本顕彰碑は、志賀哲太郎先生がお生まれになり幼少年期を過ごされた中村家（益城町田原 330 番地）の前に建立された。

中村家は古い歴史を持つ地元の名家であり、第 8 代当主中村傳兵衛が、江戸時代末期に沼山津手永の役人を務めていた頃、地域振興のため隣村河原村（現西原村）の腕利きの鍛冶屋志賀甚三郎（志賀哲太郎先生の父）を招いて屋敷内に住まわせたことから、志賀家と中村家の深い関りが生まれた。

この顕彰碑は、本会初代会長松野國策先生が、生前、顕彰碑の建立を企画し、題字を用意しておられたことに基づいて建立されたものであり、松野先生を偲ぶよすがともなった。松野先生は、志賀先生の顕彰は地域文化の興隆に寄与するものであり、何より子どもたちの教育に大きな成果をもたらすものであることを力説しておられた。

この碑の建立を何より喜んで下さっているのは、松野先生であろう。

■ 会長挨拶

宮 本 睦 士　（本会会長・益城町教育委員・益城の歴史遺産を守る会会長）

秋も深まり、黄金色に輝いていた稲田はとうに稲刈りを終え、見渡すかぎり穭田（ひつじだ）となりました。朝夕の風にも肌寒さが感じられるようになってまいりましたが、皆様、いかがお過ごしでしょうか。

昨年来国民生活を狂わせてきた新型コロナウイルス感染症は新規感染者数が減少しつつあり、「緊急事態宣言」や「まんえん防止重点措置」も解除されました。第６波の懸念もあり、まだまだ日々の生活や行動、予防対策を緩めることはできませんが、早く完全収束に向かってほしいものです。

さて、志賀哲太郎顕彰会の活動も感染症の影響を受け、思うように進めることができずにおり、皆様には申し訳なく思っております。

振り返ってみますと、この会は、一般にはあまり知られておりませんが、「台湾大甲の聖人」として今もなお台湾の人々に敬愛されている志賀哲太郎先生の生誕 150 周年を記念し、先生の功績を広く町民・県民に周知することを目的として平成 27 年９月６日に設立されました。

初代会長松野國策先生は、郷土史家として益城町の歴史に精通され、志賀先生の顕彰にも意欲的に取り組まれ、会の基礎づくりに大きな成果を残されました。しかし、平成 28 年の熊本地震で被災された先生は、心労も重なって体調が悪化し、惜しくも同年 12 月 29 日に逝去されました。

この度、松野先生が揮毫されていた題字をもとに、志賀先生生誕地跡（益城町田原・中村家）に「生誕の地　志賀哲太郎顕彰碑」を建立しました。昨年（令和２年 12 月）建立された「志賀哲太郎先生之碑」と併せ、二つの貴重な碑ができたことになります。

松野先生は、ご生前、「青少年には人格陶冶の模範となる人格、向上の指針となる事跡、この二点を兼ねた先哲の功業を紹介・提示する必要がある。（中略）身近な郷土の偉人は、誇りを持たせるものであり、それは郷土愛につながる。益城町特に津森においては、（中略）志賀先生は郷里に誇るべき偉大な方なのである」と述べておられます。（『志賀哲太郎小傳』「はじめに」）

日清戦争後に日本に割譲された当時の台湾は、教育には極めて関心の薄いところでした。志賀先生はそのような台湾に渡り、大甲という町に 26 年間住み続け、郷里へは一度も帰ることなく台湾の子どもたちの教育に半生を捧げ、優秀な人材を数多く育て、台湾教育史に大きな足跡を残しておられます。

また、台湾の文化を尊重し、大甲の町を愛し、大甲の人々に寄り添い、誰に対しても差別をせずに誠実に振る舞っておられます。また、自らは、慈悲（おもいやり）、節倹（ひかえめ）、謙虚（つつましさ）を心の戒めとして過ごされ、子どもたちにもその大切さを諭されました。

まさに、松野先生が言われた如く、功績、人徳（豊かな人間性）ともに優れた人物です。地元津森に建立された２つの碑を前にして、松野先生もきっと喜んでおられるものと思います。

「顕彰碑」建立に当たっては、中村家（第 13 代啓一氏・第 14 代康弘氏）のご理解とご協力はもとより、今回も多くの皆様から浄財をお寄せいただきました。心よりお礼を申し上げます。

本会としましては、今回の生誕地顕彰碑建立を機会に、志賀先生を郷土の誇りとしていただけるよう、益城町民や熊本県民の皆様に対し、先生の顕彰活動をさらに推進してまいります。今後とも皆様方のご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

末尾ではございますが、このたび、幼少期の志賀先生の育成に多大なる影響を及ぼされた中村家のことにつきまして、当家のご親族、吉本達雄様から綿密な調査に基づく玉稿を頂戴いたしましたことはこの上なく有難いことでした。この場をお借りして深甚の謝意を表します。

■ 資料で辿る志賀哲太郎の幼少年期　（その１）

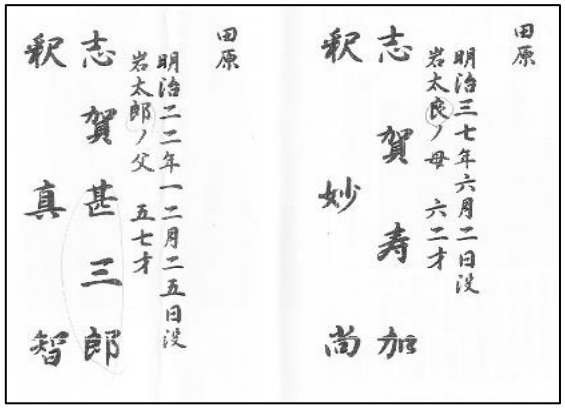
増 田 隆 策　　（本会アドバイザー・郷土歴史研究家・元山都警察署長）

（「志賀哲太郎資料集」（平成 29 年 12 月 29 日発行）から抜粋）

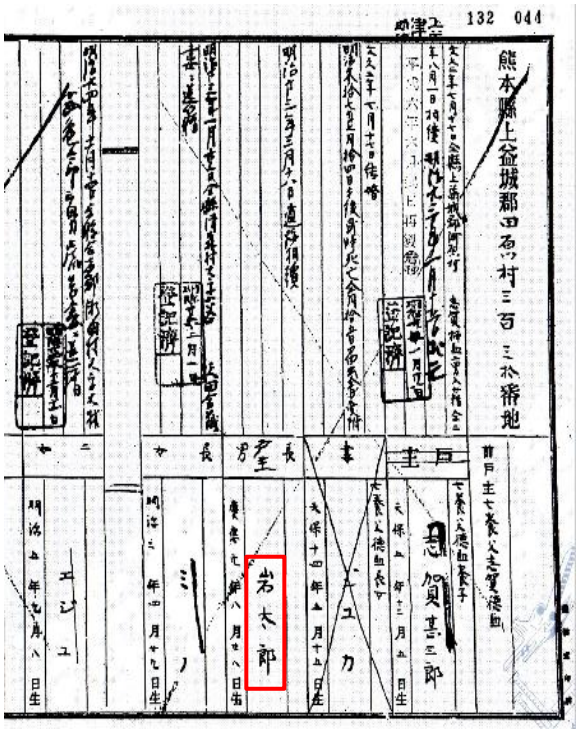
1　熊本県田原村（現益城町田原）で出生

志賀哲太郎は慶応元（1865）年８月 28 日上益城郡田原村（現益城町田原）の鍛冶屋志賀甚三郎の長男として生まれた。台湾鐵砧山にある哲太郎の墓碑には慶応２年８月 28 日生まれとあるが、戸籍上は慶応元（1865）年生まれで幼名は岩太郎といった。生家は中村家の敷地内にあったが、現在は畑となっている。平成 28(2016)年４月の熊本地震で石垣の一部が崩壊した。土地の所有者中村啓一氏によると、今でも畑から鉄片が出てくるとのことである。東隣の浄信寺の過去帳には哲太郎の両親の名がある。南側には魚釣りをして遊んだ木山川が流れ、その上流にこの村の惣庄屋であった矢嶋家がある。同家は産業を振興し、学問を尊ぶ施策を行ったので優秀な人材を多く輩出した。特に矢嶋家の四賢婦人（竹崎順子、徳富久子、横井つせ子、矢嶋楫子）は有名である。こうした環境の中で哲太郎は向学心旺盛な子供へと育った。

中村家の庭
手前の畑が生家跡　（H28.12 撮影）



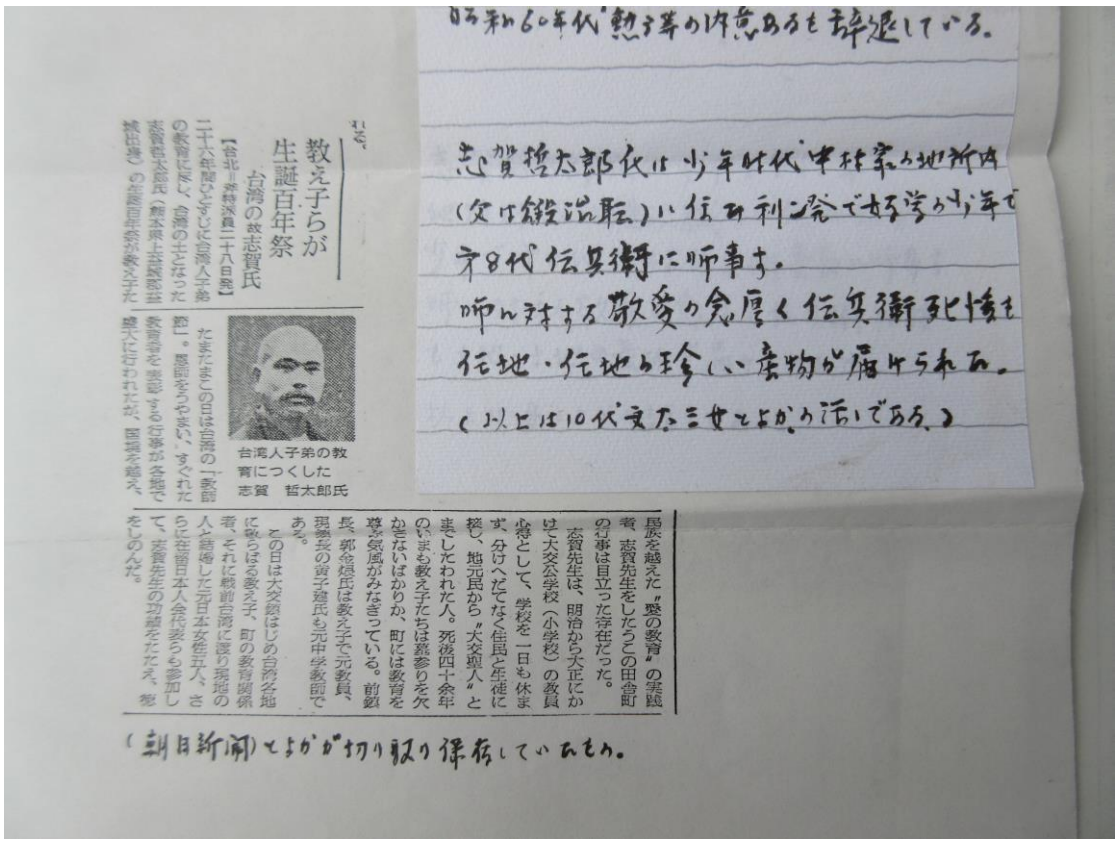
浄信寺の過去帳
（弘谷多喜夫氏提供）



益城町役場発行の戸籍謄本（澤田寛旨氏提供）

2　中村傳兵衛のてほどき

哲太郎は、隣家の第八代当主中村傳兵衛（1807～1874）に気に入られ、家族同然に可愛がられた。読み書きの手ほどきを受け、同家の書籍箱から本を取り出しよく読んだそうである。現在第 13 代中村啓一氏宅に哲太郎が読んだ本が保存されている。第 10 代中村文太氏の三女トヨカは「志賀哲太郎氏は少年時代中村家の地所内に住み利発で向学心旺盛な少年で第八代傳兵衛に師事した。師に対する敬愛の念が厚く傳兵衛死後も任地から珍しい産物が届けられた」と回想している。この回想メモは、トヨカが昭和 41 年の志賀先生生誕百年祭の朝日新聞記事と一緒に保管していたものである。また中村啓一宅には、哲太郎が大正 6 年中村文太氏に出した年賀葉書がある。哲太郎の直筆で書かれたもので現存しているのはこれだけである。



昭和60年代 勲3等の内意あるも辞退している。

志賀哲太郎氏は少年時代中村家の地所内（父は鍛冶職）に住み利発で好学の少年で第8代伝兵衛に師事す。
師に対する敬愛の念厚く伝兵衛死後も任地・任地の珍しい産物が届けられた。
（以上は10代文太三女とよかの話である。）

教え子らが生誕百年祭

台湾の故志賀氏

【台北＝森特派員二十八日発】二十六年間ひとすじに台湾人子弟の教育に尽し、台湾の士となった志賀哲太郎氏（熊本県上益城郡出身）の生誕百年祭が教え子たち

台湾人子弟の教育につくした志賀　哲太郎氏

たまたまこの日は台湾の「教師の日」。恩師をうやまい、すぐれた教育者を表彰する行事が各地で盛大に行われたが、国境を越え、民族を越えた"愛の教育"の実践者、志賀先生をしたうこの日会町の行事は目立った存在だった。

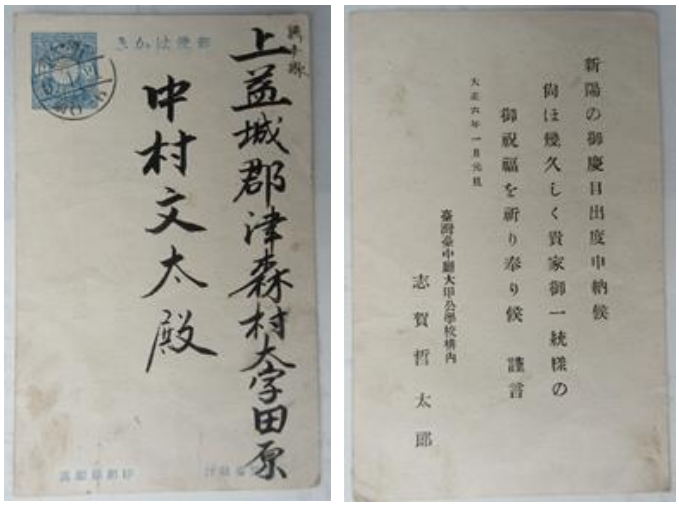
志賀先生は、明治から大正にかけて大交公学校（小学校）の教員一筋として、学校を一日も休まず、分けへだてなく住民と生徒に接し、地元民から"大交頭人"と慕、したわれた人。死後四十余年のいまも教え子たちは墓参りを欠かさないばかりか、町には教育を尊ぶ気風がみなぎっている。前議長、郭金煥氏は教え子で元教員、現議長の黄子建氏も元中学教師である。

その日は大交頭はじめ台湾各地に散らばる教え子、町の教育関係者、それに戦前台湾に渡り現地の人と結婚した元日本女性五人、さらに在留日本人会代表らも参加して、志賀先生の功績をたたえ、彰をしのんだ。

（朝日新聞）とよかが切り抜き保存していたもの。

トヨカの哲太郎回想メモと一緒に保管していた昭和四十一年九月二十六日朝日新聞「生誕百年祭」記事　（中村啓一氏提供）

哲太郎が読んだ書籍（H28.12 撮影）



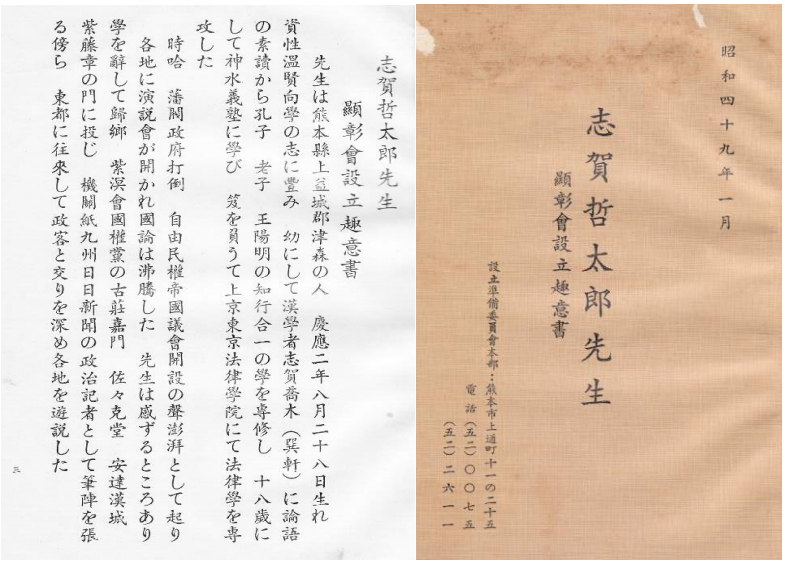
哲太郎直筆の年賀状（大正６年）
（中村啓一氏提供）

３　志賀塾

哲太郎は、明治５（1872）年、７歳のとき、津森村木山の志賀塾で読み、書き、そろばんをはじめ、四書五経の手ほどきを受けた。昭和 49（1974）年の「志賀哲太郎先生顕彰会趣意書」、島津憲房氏の回想集「台湾への架け橋」、斯文第 120 号「志賀先生（伊藤賢道）撰文」訳註は、いずれも志賀塾について柳河藩校訓導の志賀喬木（しが たかき・号：巽軒）の塾としているが、塾の所在は確認できない。当時、横井平四郎（小楠）の肥後学を学ぶため、柳河藩から多くの藩士が沼山津の四時軒に来ている。藩士たちは沼山津郷会所が木山にあったことから木山で寝起きし私塾を開きながら肥後学を学び、その後明治になっても実学党政権下で勉学を続けており、志賀喬木もその一人であると考えられる。

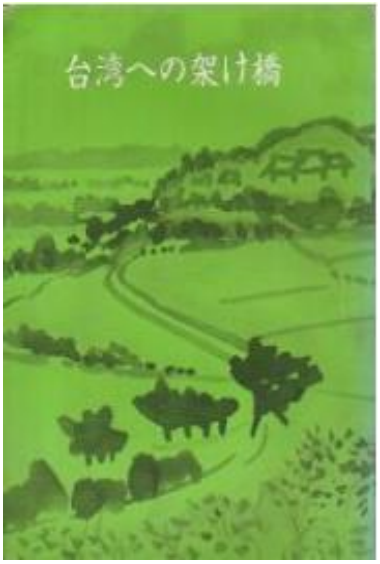
喬木は明治７年以降小天（玉名市）の蒙正館の訓導をつとめ、同９年大牟田で銀水義塾を開いて同 12 年に亡くなっている。哲太郎が学んだのは 1～2 年間と思われる。

また、神水義塾へ通うまでの約 9 年間の学歴が分っていない。この間は西南戦争があり益城も戦場となっていたため学校へ通える状況ではなく、戦争後は中村文太の三女トヨカが「少年時代は傳兵衛の書籍箱の本をよく読んでいた」と回想していることから、独学していたものと思われる。


志賀哲太郎先生
顯彰會設立趣意書

先生は熊本縣上益城郡津森の人　慶應二年八月二十八日生れ
資性溫賢向學の志に豊み　幼にして漢學者志賀喬木（巽軒）に論語
の素讀から孔子　老子　王陽明の知行合一の學を專修し　十八歳に
して神水義塾に學び　笈を負うて上京東京法律學院にて法律學を專
攻した
時哈　藩閥政府打倒　自由民權帝國議會開設の聲澎湃として起り
各地に演說會が開かれ國論は沸騰した　先生は感ずるところあり
學を辭して歸鄉　紫溟會國權黨の古莊嘉門　佐々克堂　安達漢城
紫藤章の門に投じ　機關紙九州日日新聞の政治記者として筆陣を張
る傍ら　東都に往來して政客と交りを深め各地を遊說した

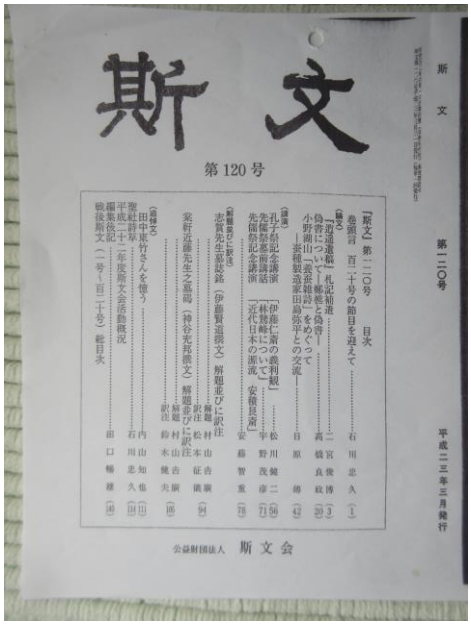
志賀哲太郎先生顕彰会設立趣意書（昭和 49 年１月）



島津憲房氏の回想集

（編集者付記）
志賀巽軒　しがそんけん（一八三一～一八七九）
幕末明治時代の儒者。天保（てんぽう）二年生まれ。筑後（福岡県）柳河藩士。木下韡村（いそん）、塩谷岩陰（しおのやとういん）に学ぶ。藩の右筆をへて評定所吟味役となり明治二年藩校文武館教授。のち筑後三池の銀水義塾で教えた。明治一二年六月八日死去。四九歳。本姓は杉森。名は憲古（のりひさ）。通称は退蔵。別号に喬木（たかき）。
（デジタル版　日本人名大辞典）

［註解］
（一）○戸籍名は岩太郎、父甚三郎（鍛冶屋）、母寿加の長男。○戸籍上は慶応元年八月二十八日生。
津森村：当時の津森村大字田原三三〇番地、現在、町村合併により益城町となる。
（二）○明治五年七歳で津森村木山の志賀塾（志賀喬木、号巽軒、漢学者）で読み書き、そろばん、四書五経の手ほどきを受けた。○津森西方二里の神水義塾・・・



「斯文」第 120 号（平成 22 年３月）と「註解」の記述

■ 資料で辿る志賀哲太郎の幼少年期　（その２）

増 田 隆 策　　（本会アドバイザー・郷土歴史研究家・元山都警察署長）

（「志賀哲太郎とその時代」（平成 31 年２月 23 日発行）から抜粋）

１　西南戦争で避難

明治 10（1877）年に起きた西南戦争は哲太郎 12 歳の時である。薩軍は政府軍に敗れ熊本城包囲を解き、二本木の本営を木山に移した。薩軍諸隊が熊本城や植木から逐次撤退してきた 4 月 17 日、総司令桐野利秋は本営木山を中心に、右翼は大津・長嶺・保田窪・健軍方面、左翼は御船に亘る 20 ㎞余りの新たな防衛線を築き、ここで南下する政府軍を迎え撃って全滅させる作戦をとることにし、約 8,000 名を配置した。対する政府軍も、山縣有朋参軍らが熊本城で行った軍議で各旅団約 30,000 名を配置した。両軍の衝突は 4 月 19、20 日に政府軍が薩軍に攻撃を仕掛けたことから始まり、戦いは一挙に熊本平野全域に及んだ。この「城東会戦」では、薩軍は左翼では敗れたものの、右翼の大津･長嶺・保田窪・健軍方面では終始優勢な状況にあった。しかし、左翼の御船を占領した政府軍は薩軍本営の木山へ攻め入ろうとしていた。これに対し桐野利秋は木山を死所と見定め決戦をする気でいた。しかし、野村忍介・池辺吉十郎らの必死の説得で翻意し、本営を矢部浜町へ移転すると決めて撤退した。

田原村は薩軍の大津～木山間の防衛線上にあり、戦闘が行われた。当時の田原村副戸長吉村周保の記録によると、「4 月 21 日政府軍が進撃して田原村に入り、翌 22 日出陣の際、薩軍残兵の捜索のため近くの村までの案内を依頼され、田原村の士族を同道させた。田原、小谷、杉堂、上陳の各村を捜索したところ、田原で弾薬五駄、小谷で白米二十七俵、衣類数十品、杉堂で具足一両、太刀数本、鉄砲数十挺など薩軍の武器弾薬等を分捕った」とある（「益城町史」引用）。このことから田原村が一時、薩軍の勢力下にあったことが分かる。

飯野村では４月 20 日午後、村の女子や子どもたちは観音堂近くの竹山の横穴に僅かな家財道具を持って避難し、男たちは薩軍に徴用され大砲を山に引き上げさせられた。薩軍に味方することを逡巡した村人たちも、殺気だった薩軍に刀を突き付けられ死にもの狂いで砲や弾箱を山に担ぎ上げ、前方の樹木を切り払うなど、怒号する薩兵に駆り立てられて生きた気はしなかったという（「益城町船野の薩軍陣地」引用）。

哲太郎の遺族澤田寛旨氏は、「祖母（ミノ＝当時８歳）は西南戦争の時、田原村でも銃声が聞こえて怖くなり、みんな避難したと語っていた」と述べ、哲太郎も家族と一緒に避難したと思われる。避難先は判明していないが、おそらく自宅北側の裏山一帯が雑木林となっており、同所に身を隠したものと思われる。

城東会戦両軍配置図（「新編西南戦史」引用）

２　教師への原点となった書「大学」

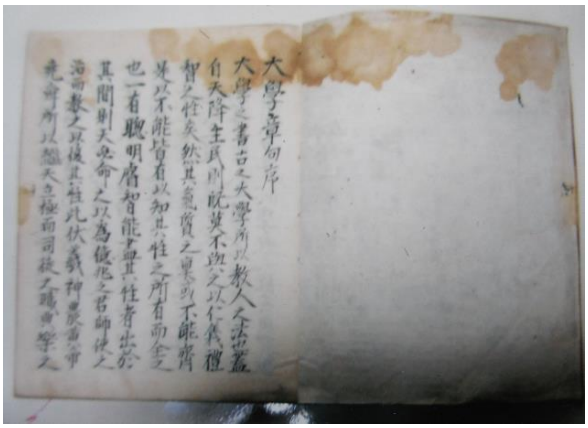
中村傳兵衛の書庫には儒学の経典である四書五経の一つの「大学」がある。「大学」は二宮金次郎像が手にしている本で、江戸時代の士族の教育に用いられ、戦前、教職者採用試験の必須科目であったこともある。

「大学章句序」の節では、「この『大学』は、昔、大学で人を教える時に用いた方法について記した書物である。そもそも、天がこの地上に人を生じさせるときは、必ず仁義礼智という本性を与える。けれども、各人には、それぞれが受けるその人特有の気質というものがある。このため、すべての人が、仁義礼智という本性を知り、生きているうちにその本性を全うできるわけではないのである。しかし、仮に本性を尽くすことができる聡明叡智（そうめいえいち）の人が、一度でもこの天と地の間に出ることがあったとする。すると天は、この人に億兆の人の指導者となることを命じる。こうして天は、この人に人々を治めさせ、この人によって人々を教え、人々を仁義礼智の本性に立ち返らせるのである。～中略～」といった内容が書かれている。

また、「大学」の節では、「子程子曰く、『大学』は孔子の残した書物であり、初めて学ぶ人が徳に入るための門のようなものである。今現在、昔の人がどのように学問をしていたのか、その次第を知るためには、現存するこの『大学』に頼るしかない。この後に『論語』や『孟子』を読むべきである。学者が必ずこの書物を拠り所として学ぶならば、学問の本道から外れてしまうこともなくなるであろう。～中略～」と記されている。

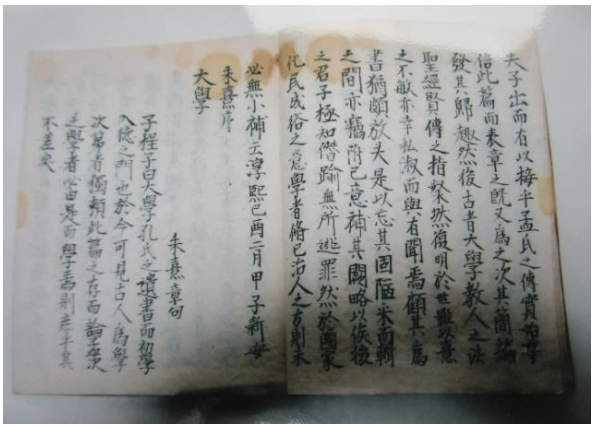
「大学」は、このように徳を記した教育指導の書であることが分かる。徳育を重視した哲太郎が教職の道に進んだ原点は、この「大学」にあったのかもしれない（「四書五経は日本の文化」引用）。

昭和 16 年撮影の台湾・新街公園の二宮金次郎像（「大甲老照片」引用）



大學章句序

大學之書古之大學所以教人之法蓋自天降生民則既莫不與之以仁義禮智之性矣然其氣質之稟或不能齊某以不能皆有以知其性之所有而全之也一有聰明睿智能盡其性者出於其間則天必命之以為億兆之君師使之治而教之以復其性此伏羲神農黃帝堯舜所以繼天立極而司徒之職典樂之



夫子出而有以梅半孟氏之傳實始尋
繹此篇而表章之既又為之次其簡編
發其歸趣然後古者大學教人之法
聖經賢傳之指粲然復明於世雖以愚
之不敏亦幸私淑而與有聞焉顧其為
書猶頗放失是以忘其固陋采而輯之
之間亦竊附己意補其闕略以俟後
之君子極知僭踰無所逃罪然於國家
化民成俗之意學者脩己治人之方則未
必無小補云淳熙己酉三月甲子新安
朱熹序

大學

朱熹章句

子程子曰大學孔氏之遺書而初學
入德之門也於今可見古人為學
次第者獨賴此篇之存而論孟次
之學者必由是而學焉則庶乎其
不差矣

哲太郎が中村傳兵衛方で読んだ「大学」（中村啓一氏協力：樋口利雄氏撮影）

３　神水義塾に通った木山往還

哲太郎は、明治 16（1883）年３月から同 19（1886）年４月まで田原の自宅から神水（しんすい）義塾までの約８キロメートルの道のりを通学しているが、利用した道は木山往還である。通学ルートを木山から説明すると、往還は、現在の県道８号線の北側を走り木山、宮園、安永、馬水、古閑と通り抜け、高速道路の下を過ぎて広崎の追分石で二手に分かれる。

追分石には「右すなとり」（砂取）、「左ぬやまづ」（沼山津）とあり、「右すなとり」方面の道を北西へ進み第二空港線を斜めに横断し、佐土原の集落を過ぎ、健軍駐屯地東側の南北に走る旧道「にいの歯科医院」前に出る。ここで昔の道はなくなるので駐屯地を西へ横断し、同駐屯地の正門に出てここから南西に坂を下り、真光寺の門前で「花立往還」と合流する。

追分石の「左ぬやまづ」方面へ行く道は「花立往還」と呼ばれる道で、しばらく堀切道（凹道）が続いて花立、東町団地、陸運事務所へと進む。ここから昔の道はなくなるので健軍駐屯地西側を南北に走る通りの「ヤマハ音楽教室」から西へ進み庄口川を渡って真光寺前で佐土原経由の道と合流する。

ここからは健軍神社の楼門を左折して参道を西へ進み八丁馬場の電車通りを横断する。神水義塾は電車通りを横断して直ぐのところから江津湖方面へ左折して約 100 メートルの地点が神水義塾である。木山往還はこのあと砂取、国府、春竹、本山と進み薩摩街道と合流する（「熊本の街道と峠」引用）。

哲太郎は、広崎の追分石で分かれる二つのルートのうち花立往還の方が距離的に近いことから、このルートを利用したと思われる。また広崎の追分石の古写真（昭和 50 年頃撮影）を見ると舗装されていないため雨降りはぬかるみ状態だった思われる。追分石の約 200 メートル東に猫伏石（ねこぼこいし）がある。これは横手五郎が運んだと伝わる巨石で、周りには大きな木が生えていて、当時は旅人の休憩場所であり、哲太郎もここで一休みしたものと思われる（松野國策「語り口益城の民話」引用）。

哲太郎が通った木山往還

４　僧八淵蟠龍の講演説教に随行

八淵蟠龍

哲太郎は、神水義塾へ入塾してから名僧八淵蟠龍（やつぶちばんりゅう）から仏典を学び、八淵が行う各地での講演に随行した。八淵は、上益城郡小坂村（現御船町小坂）東福寺の住職で嘉永元（1848）年、上益城郡小坂村で生まれた。少年時代川尻の戸田塾に学び堀田、藤岡両氏と共に戸田門下の三傑と称された。

若年の頃から奇人と評され、僧侶としての型にはまらず、自己の信ずる道に進み法会の日にも肉食を断たなかった。元来人に見栄を張ることが大嫌いで住まいを訪問した人が驚くようなむさ苦しい家に住んで極平気なもの、何人が訪れても心にもないお世辞をふりまいて人をあしらうような事は少しも無かった。

東福寺は、あらゆる階層の人々の信仰の的となっていた。八淵が一度大伽藍を建立すると言えば忽ち出来たであろうが、八淵はそんなことにはお構いなしであった。大きな藁葺のお堂が八淵の高風を現わしていた。このような状況でもちろん身装も構わなかったが、若い時には多少の借金を拵（こしら）えていた。それは常に他人を憐れむあまり、自ら借金を作ってまでも人の為に貢いだからである。

こうした美しい心から修行をスタートした八淵は次第に英才を認められ、その後、大分の南渓師に就いて仏学を修め 30 歳にして県下 60 か所のお寺をまとめて法住教社社長となった。明治 16（1883）年神水義塾で教鞭をとり、明治 20（1887）年機関誌「国教」を発行、明治 26（1893）年と大正２（1913）年の米国に於ける世界宗教会議に日本代表として出席している。

渡米の折は、日本移民居住地を巡り、また日本全国を東奔西走して講演説教に従事し、同情や博愛の心に満ち人の苦しみを見ては我が身を犠牲にしても救済し、このため負債を生じることがあっても顧みないほどであった。

また、新旧の書籍を読破した事は到底凡人の及ぶところでなく、特に国漢学にかけては研究を怠らなかった。講演は医師の中に交わって堂々と衛生講話を試みたこともあり、医師仲間から感嘆の語を発せられるほど博学多識であった。

赤松連城

島地黙雷

西本願寺の学者赤松連城、元老島地黙雷の両師をして「八淵は熊本の八淵に非ず、日本の八淵なり」と感嘆せしめた。八淵は功労が認められ明治末、本願寺より親授一等に叙せられた。大正 15（1926）年８月 17 日長崎県下を巡教中、諫早で亡くなった。享年 79 歳（「肥後名僧傳」引用）。大甲の聖人と呼ばれた哲太郎の自由・平等・博愛の精神は、八淵の影響によって培われたものと思われてならない。

■ 中村家と志賀家の繋がりと哲太郎少年が受け継いだ慈悲の心

吉 本 達 雄　（広島市在住、中村家第 10 代中村文太・かつもの孫）

まえがき

３年前、「志賀哲太郎先生顕彰のつどい」が益城町文化会館ホールで行われ、当時の駐福岡台湾総領事館の戎（えびす）総領事の講演の中で特に印象に残っている言葉がありました。それは父母から子へ、祖父母から孫へ語り継いでいく台湾人家庭での「口耳相傳（こうじそうでん）」すなわち、口伝えの大切さです。私（83 歳）の祖父母は、父方母方ともに江戸時代後期の嘉永、安政、文久の時代に生まれた４人で、私が生まれた時（昭和 13 年）にはすでに亡くなっていて、顔を見たこともなく、何か聞くことも叶いませんでした。先祖の事が少しでも聞けたのは、明治 31 年（1898 年）生まれの母親が語り継いでくれた幾つかがあるのみです。もっと聞いておけばよかったのにと少々残念に思っている次第です。志賀甚三郎夫妻のこと、哲太郎先生についても、母は自分の両親から多少は聞いていて知っていた筈ですけれど、私に直接語ってくれたことは一度も記憶に無く、只々残念に思っています。しかし、70 数年前のちょっとした母との会話の一言が私にとって、大変重要な歴史の究明への手がかりになろうとは思ってもいませんでした。それは私が幼少の頃、田原の坂道を歩きながら聞いた口伝えで、『この切り通し(きりどおし)は、うちのご先祖様が難行苦行して作ったとばい。それでご褒美を頂いたとさ。』の一言でした。日本の歴史、故郷(ふるさと)の歴史、昭和、大正はだんだん遠くなり、明治はもっともっと遠くなりにけりで、江戸は無茶苦茶遠くなり霞んでしまって何も見えない、分からない時代になってしまいました。しかし歴史はそれでも厳然と存在していたわけで、事実をより正しく追求し、それを基に想像力を磨くことが出来るなら、江戸も明治も大正も昭和も少しだけでも近くなってくるものだと思っています。

1．志賀哲太郎先生の生誕地、田原村の紹介

志賀哲太郎先生は、現在の熊本県上益城郡益城町田原(たばる)の地で、志賀甚三郎 ジュカ夫妻の長男として幕末期の地名肥後国熊本藩上益城郡沼山津(ぬやまず)手永(てなが)田原村で、慶応１年(1865 年)に誕生されました。何故、沼山津手永と称するかといえば、肥後国熊本藩初代藩主細川忠利公が各郡ごとに村々を整理統合した手永と称する行政機構を導入したからで、寛永 12 年(1635 年)から明治３年(1870 年)郡制改革までの 235 年間、各郡ごとに各手永が存在しました。最終的に肥後国熊本藩全体で 51 の手永と 51 人の惣庄屋(そうじょうや) を配置しました。現在の益城町管内では沼山津手永と鯰(なまず)手永がありました。田原村は 沼山津手永に属しました。他村と較べて田畝(たうね)数や畑畝(はたうね)数とも少ない村でした。益城台地の畑に行くには丘を越え坂を越え、農具や荷物を担いで 1 時間ほど歩いていかねばならず、田原はもちろん近隣の村々の人々は本当に大変だったそうです。畑では野稲、大豆、小豆、小麦、甘薯(からいも)を主に耕作し、中でもからいもの惣高(出来高)は沼山津手永の中では収穫量一位の村でした。天保 9 年(1838 年)には、惣庄屋 光永熊助が書いた「沼山津手永村々盛衰段取帳」による評価があって、村々を、1.上段村々　2.中段村々　3.下段村々　4.下々段村々の 4 つに区分しているものです。単に村の規模や惣高の比較をするものではなく、村々が抱えている問題点をどう改善してきているのかその努力と耕作面積と年貢の釣り合いが取れているか等々から見た評価です。田原村は幸いにして、1 の上段村々に位置付けられていて、他村では小谷(おやつ)村、曲手村、辛川村、戸次村の名が挙がっています。

からいもについては、面白い逸話が残っています。それは、中村家 13 代 故中村啓一の話しです。沼山津手永の中で最初に試験栽培したのが中村家の先祖だったそうで、人目につきにくい近くの畑を選んで植え付け育てていたところ、何者かが侵入し、からいも畑を荒らして逃げて帰ったけれど、からいも

の事がまだよく分からず、肝心の土の中の芋は取らず、地上の葉っぱと茎のみをちぎって持ち帰って行ったという嘘のようで本当の話しです。

2. 中村家の歴史と人々

現在は益城町田原の土地で、昔は「古屋敷」の中村家と呼ばれた人々は先祖の教えを守って、 現在の14代 中村康弘まで家祖から計算すると、約400年の間どんな時代においても変わることなく、生業(なりわい)として愚直に農家だけを営み続けてきたのが中村家です。歴史を辿ると、細川氏入国後の天草・島原の乱(寛永14年(1637年) ～同15年(1638年)]などの戦乱時代を経たのち、旧詫摩郡本庄手永(二万石)の近見村(現在の熊本市南区近見町)居住の同姓の中村孫一が、家祖 中村外記の嫡女の聟養子となったのが初代で、寛文(かんぶん) 7年(1667 年)、今から354年前に『農は国の本(もとい)なり』と、旧記にあることから当時の兵農分離政策で帰農したものと思われます。初代中村孫一改め孫市から5代迄、無苗の名前だけでした。6代からは旧郷士となり中村姓を名乗るようになりました。8代中村傳兵衛の娘の聟養子となった 9 代 中村善右衛門(旧姓今村亀太郎)は、結婚前の嘉永 7 年(1854年)10月にはアメリカのペリー艦隊の再度来航を受けて、肥後藩の大筒手(大砲方)として相州浦賀表(大津陣 屋)に総勢36人の一員として、安政2年(1855年)10月まで出陣しました。観音崎御台場は 江戸湾防衛の要所である為、当時の幕府要人である水戸藩主の徳川斉昭や公儀奉行 水野筑後守、川路左衛門尉聖護、目付 大久保左京将監ら幕閣が御台場視察と大砲発砲の見分に訪れている事が、今村亀太郎の道中日記に記されています。しかし、9代目となって数年後の文久2年(1862年)、当時の疫病、はしか(麻疹)により働き盛りの32歳で急逝しました。中村善右衛門の一人娘 勝茂(かつも)の弟、文太郎も翌年幼くして病で亡くなっています。8代　中村傳兵衛は当時 56歳で、沼山津会所の現役の役人でしたが、傳兵衛一家にとって最大の悲しみとなりました。その3年後に志賀家の岩太郎少年が誕生しています。その同じ時期に、中村善右衛門の一人娘、中村勝茂(かつも)が明治5年に書いた一文字の「幕」という書が残っています。書には、“明治5年 申 5月25日かつも”とあり、14歳の時に書いたものです。「幕」と書いた気持ちは、多分、江戸から明治へと時代が変わり近代日本の幕開けを心から待ち望んだものと思われます。

5月25日は、旧暦表示で現在の大陽暦では6月30日となります。その太陽暦の6月には、明治天皇の最初の西国巡幸が行われ、九州では最初の巡幸地長崎に次いで、6月18日・19日の2日間、 熊本を巡幸され滞在されています。旧暦では5月13日・14日となり、後日、この巡幸の知らせがおそらく田原村にも入ってきて乙女心の興味もあってか、書いたものと思われます。この巡幸の目的は天皇の存在を国民に周知徹底させるとともに、権威の確立をはかる為に行われたものといわれています。この明治5年は、志賀岩太郎少年が7歳で木山塾に通い始めていて、記念すべき年と重なり何か因縁を感じてしまいます。その時の事を勝手に想像してみると、木山塾から帰ってきた岩太郎少年がその書を見て不思議そうな顔をしていると、かつもは、「あなたも字をよく 習ってこれからは勉強せんといかんとよ。」と諭すと、岩太郎少年は「わかってます。ぼくもべんきょうしてりっぱな人になるけん。」というような会話が本当にあったかもしれません。隣同士で

中村勝茂（かつも）の書

住んでいる娘と少年とには濃密な人間関係があり、その後も続いたであろうことは十分に想像できます。そして側には 66 歳と老いた当主の傳兵衛も居て、「そうだよ、そうだよ。」と笑いながら岩太郎少年を見ている光景が目に浮かんでくるようです。かつもは岩太郎少年が生まれた時からずっと何でも知っていて、哲太郎が中村家を去るまで温かい目で見ていた人でした。

かつもは結婚して３人の男児をもうけ、三男の中村卯四郎(うしろう)は熊本県立中学済々黌を出ると後、小学校の教師となりました。最初の赴任校は当時の白川尋常小学校で、教え子の中の一人に、東海大学の創立者であり、のち衆議院議員にもなられた松前重義氏がおられました。 嘉島町の尋常小学校から転校してこられ、５年生から６年生まで、松前少年の教師を勤めました。卯四郎は数年間教師をしたのち、法律家を目指して上京し、中央大学法学部に入学して苦労の末、大正 11 年(1922 年)に行われた第１回 判事・検事登用試験において合格して以来、長年検事を勤め、昭和 20 年(1945 年)当時、奈良地裁の次席検事でありましたが、敗戦によりマッカーサーの公職追放令で退官し弁護士となりました。同じく公職追放されていた教え子の松前氏から、政界への出馬の要請を再三されるも断り続け、弁護士のみの仕事をしました。昭和 60 年代に勲三等の内意あるも辞退して“肥後もっこす”の気性を貫き通しました。生涯恩師と教え子の関係は長年続いていたと聞いています。

中村勝茂（かつも）三男、中村卯四郎が中学４年当時に描いた絵

中村勝茂（かつも）晩年の写真

3. 沼山津手永会所役人 中村傳兵衛

志賀哲太郎先生の幼年時代の学問の師といわれている、当家 8 代 中村傳兵衛は幕末の文化 4 年(1807 年)に７代 中村寿作、妻 智恵(ちえ)の長男として誕生しました。５代 傳兵衛、６代 中村孫助、妻睿(えい)が健在で、名前は千代吉と命名されました。文化４年といえば藩政後期で、沼山津手永では木山川水系での洪水被害が度々起きたりして、村々では質地、譲地などの諸問題が多く発生し、農民が零落して困窮する時代でありましたが、中村家は先祖伝来の土地を何とか守り続けることが出来て、半農半士の生活をすることが出来ました。一人息子の千代吉は祖父母の孫助夫婦と両親の愛情と薫陶を受けて、近くの寺子屋などで漢字や仮名遣い、算盤などを習い、四書五経についても目に触れ教わりながら育ったものと思われます。質素倹約を旨とする家庭の中で成長し人倫の尊さを学び、弱冠 14 歳の時、沼山津会所での職を頂き、文政３年 (1820 年)から明治３年(1870 年)までの足かけ 51 年の長きに亘り、精勤することが出来ました。会所での主な略歴は、文政７年(1824 年)小頭役に始まって、天保６年(1835 年)会所詰本役となり、嘉永２年(1849 年)43 歳で副手代役、安政元年(1854 年)48 歳

で惣庄屋を直接補佐、代行業務を行う手代本役となり、重責を果たす事となりました。安政２年(1855年)には、※御郡代直触(ごぐんだいじきぶれ)となり旧郷士身分扱いとなりました。明治元年(1868年)沼山津会所見締役となり、明治３年(1870年)には、熊本藩知事 細川護久様(旧肥後国熊本藩 12代藩主)の鯨・沼山津両郷巡幸の時、沼山津会所にて御目見え仰せ付けられ、御改革を貫徹すべく勉励せよとのご命令を下されたとあります。同年に、士族に仰せ付けられたのち、御改革にて郷士となりました。明治 5 年(1872 年)明治政府の身分族称で士族となりました。会所役人中、最大の苦労は天保 2 年(1831年)から天保９年(1838年)までの大飢饉への対応に追われ、中でも大雨による河川の氾濫が増発し改修工事に多忙を強いられた事でした。傳兵衛は苦労が多かったせいか、明治７年(1874年)病にて68歳にて死去しました。西南戦争の３年前でした。

（※　御郡代直触とは、直接郡代からお触(ふれ)が届く者の事を指す。触とは、知らせや命令の事。）

生前の中村傳兵衛は日常生活では仕事の傍ら、書や絵画を趣味とする文化人でもありました。 余談となりますが、傳兵衛の死後、津森生まれの徳富蘇峰翁が、上京される前の少年時代に中村家に寄られたことがあり、傳兵衛の蔵書の中から何冊かの本をお渡ししたことがあったという話も伝わっています。

中村傳兵衛が役人の頃、家族親戚を描いた絵

4. 中村家と志賀家の繋がりと哲太郎少年が受け継いだ慈悲の心

今年、令和３年(2021年)は志賀哲太郎先生の生誕156年、没後97年にあたります。先生が誕生された慶応元年(1865年)は近代日本を迎える明治元年(1868年)の３年前となります。そこで、ご両親の甚三郎、ジュカ夫妻が鍛冶屋として中村家の屋敷の中で稼業された経緯というか理由なりを私なりに推察してみました。中村家に来られた時期は、中村家にも文書など裏付ける資料はありませんけれど、中村傳兵衛が沼山津手永の手代本役となった、安政元年(1854年)以降であることは間違いないようです。惣庄屋の補佐代行を行う仕事柄、当時村々の道路や河川の改修や道路の新設については藩政後期、

公共事業に注力するようにとの惣庄屋の業務命令もあり、積極的に推進したようです。口耳相傳(こうじそうでん)口伝えの例として、田原村の切り通し工事もその一例に過ぎません。この切り通しは、田原村はもちろん、上陳村、下陳村などの農家の人々が丘を越え坂を越え、曲がりくねった狭い道を、大きな農具や荷物を担いで往復２時間ほど歩かねばならない状況でしたので、村の農家の人々が是非つくってくれとの要望があり、工事を始めたものです。問題点として、村民の労役提供の協力をしてもらうことと、岩石掘削用の鍛造品をいかに生産し調達してもらうことが工事の成功の鍵でした。熱や変形に強い鍛造品を作れる鍛冶職人は意外と少なく、ようやく探し得たのが、河原村（現西原村））に住む腕の良い職人であるその人、志賀甚三郎でした。特に切り通し工事に使用するつるはし、鏨(たがね)、唐鍬(とうぐわ)などは、熱に強く変形しにくい品質を求められていたからでした。そのように考えなければこの切り通し工事は完成しなかったはずです。この工事がどれだけの年月を要したかわかりませんが、傳兵衛と甚三郎にとっては大変な工事で、汗水流しながら仕事が辛いときには涙を流し、たまには議論もしながらうまくいけば笑い合うという状況の中で、お互いを信じ合い、感謝し合うという信頼感と達成感の中で、二人は親戚同士のような気持ちになって目的を遂行できたものと推測されます。その気持ち、心が、父親甚三郎から子息哲太郎に引き継がれていったものと思われます。この切り通しが完成したことにより、益城台地にある大久保や、石岸原(いしがんばる)などの畑に行く場合、迂回せずに馬車も通れるようになり、重たいからいもも運べるようになり、時間も随分短縮されて村人たちから大変感謝されたことだと思われます。今ではその場所は、山も、切り通しも崩されて無くなり、近くには津森グラウンドもできたこともあり、姿、形もなくなってしまい、当時の事情をわかっている人は、誰ひとりもいませんけれど近隣の田原や上陳、下陳の人々には当時のことを少しでも知っていただければ幸いなことです。

次に、甚三郎の鍛冶屋を沼山津手永、現役の手代本役の会所役人である中村傳兵衛の屋敷内でわざわざ作業を依頼した理由は何かと考えれば、1.中村傳兵衛が責任を持って直接管理ができて、掘削作業に使用する鍛造製品を遅れることなく供給してもらえるので、目の届く側の屋敷内での作業が一番効率が良いと判断したからに違いありません。つまり専念して対応してもらえれば作業の遅れもなく生産が計画的に推進できると考えたからです。2.当時の近隣の鍛冶屋は上陳村に１軒、下陳村に１軒、小谷(おやつ)村に１軒の３軒がありましたが、それらの鍛冶屋に掘削用の鍛造製品を特化して発注すると、従来の民生用の農具用の鍛冶製品の生産に支障を来たす恐れがあったので、特注品を中村家の屋敷内で作るようになったと考えるのが妥当だと思います。この作業を沼山津手永から公共の作業を依頼するからには、最低でも土地、建物については無償提供でお願いしたに違いありません。

その当時は、安政の頃で幕末といえども厳しい掟のある時代であり、人々全般、特に農民の在地固定と耕地移動の禁止が基本政策でしたので、農民以外でも転地、譲地、借地などは勝手に出来ませんでした。志賀甚三郎の河原村から田原村への転地についても、当然、沼山津手永惣庄屋の許可を得なければなりませんでした。転地の許可が降りた理由は、切り通しを作ることにより畑への往復の時間短縮が計れ、田原村ほか、農産物の生産が上がり農政にプラスとなり、沼山津手永惣庄屋の許可を得ることが出来たからだと思われます。

最後に、誰が河原村から志賀甚三郎を呼び寄せたかについては、必然性として考えると中村傳兵衛本人であり、紹介の労をとったのは、９ 代 中村仁四郎(紫溟会会員)の父親である河原村士族 戸田佐助の関係者ではなかったかと思われます。志賀家は中村傳兵衛ほか、中村家の家族とは日常的に濃密な親戚のような生活ぶりであっただろうと思います。そういう暮らしの中で志賀哲太郎(幼名岩太郎)少年は、中村家と志賀家の暮らしをみて人間同士お互いを信頼し合い、恩義と礼儀を重んじることが極めて大切であるという事を身をもって学ばれて、後々の人生を「己の為でなく、人の為、人の為」の自己犠牲の人生を貫かれた、まさしく慈悲の心の聖人であられたと、中村家の子孫と致しましても尊敬し、誇りに

思っている次第です。

あとがき

今回、機会を頂き標題の拙文を書かせていただきました。内容その他につきましては独断的で間違っていると思われる方がお有りかと存じますが、私なりに歴史の事実を究明したつもりです。そんな事実があったかもしれないと少しでも納得して考えていただける方がお一人でもおられたら、私にとっては望外の幸せです。

昭和 30 年頃の中村家の庭の写真

平成 22 年（2010 年）、中村家の屋敷の風景写真

【事務局補記】

志賀哲太郎先生生誕地顕彰碑の建立を企画し、その記念誌とすべき本誌（会誌５号）を編集するにあたって、志賀先生の幼少年期にスポットを当ててみたいとの思いは以前から抱いていました。

先生のご活躍の場は台湾の大甲でありましたため、地元には全くと言っていいほど記録がなく、また、語り伝える人もほとんどありませんでした。

このたび、志賀先生が幼少年期を過ごされた中村家の歴史に詳しい吉本達雄さん（広島市在住）にご投稿をたまわり、貴重な写真のご提供など、多大なるご協力を頂けたことはまことに幸運なことでした。心から御礼を申し上げます。

■ 大甲の聖人　志賀哲太郎先生　（その１）

折 田 豊 生　（本会事務局長）

はじめに

台湾台中市大甲区の鐵砧山の南麓に志賀哲太郎先生の大きな墓があります。先生は、明治から大正にかけて台湾の公学校（台湾人の小学校）の教師として尽力した人物ですが、注目すべきは、その周囲に教え子達の墓が幾つも点在することです。

教え子達から死後の世界までをも共有することを切望され、聖人と呼ばれた志賀先生とは、いったいどんな教師であり、どんな人物だったのでしょうか。

生い立ちから渡台まで

志賀先生は、慶応元（1865）年肥後国田原村（現益城町田原）で出生（幼名岩太郎）。父甚三郎は腕のよい鍛冶屋で、隣村河原村（現西原村）から田原村に請われて移り住みました。住居は地元の有力者中村家の屋敷の一角にあり、当時当家の 8 代当主傳兵衛は、岩太郎が並みの少年でないことを見抜き、自ら読み書きを教え、四書五経の手ほどきを施します。向学心旺盛な岩太郎少年は、傳兵衛を師と仰いで学業に励み、家業を手伝う傍ら、中村家所蔵の書籍に読み耽ったと言われています。

鍛冶屋を継がせるには惜しいと見た両親の理解もあり、岩太郎（後に哲太郎と改名）は、志賀塾（横井小楠門下の志賀喬木が木山で主宰）や神水義塾（中西牛郎に英語、中西惟寛に陽明学、八淵蟠竜らに仏教を学ぶ）で学問を積み、21 歳で上京して明治法律学校に学び法律学を専攻します。

24 歳のとき、父甚三郎の死去に伴い、学業半ばで帰郷。九州日日新聞（現熊本日日新聞）の記者となり、佐々友房主宰の紫溟学会に入会し、国権党の党員となって、佐々や古荘嘉門、安達謙蔵ら（彼らは後に国会議員となり各々要職を歴任）と政治活動に明け暮れていました。

しかし、醜悪な政界に疑問を覚えつつあった志賀先生は、教育勅語発布を転機として、教育こそ自分の生涯を捧げるべき道と見定め、熊本市近隣の原水尋常小学校や大原義塾で教師の経験を積んだ後、明治 29 年 12 月、新天地台湾へ渡りました。

芝山巌事件

明治 28 年、日清戦争後の下関条約により、台湾は日本の領土となりました。清国時代の台湾は「化外の地」と呼ばれ、マラリア等の風土病の蔓延、5%に満たない識字率、20 余りの未開部族の存在など、文明の影響の及び難い後進地域と見なされていました。

そのような状況下で、日本政府が植民地政策として真っ先に取り組んだのは、教育と衛生の確立でした。

台湾統治開始とともに台北に置かれた芝山巌学堂に、日本全国から選りすぐられた 6 人の教師が派遣されます。そのリーダーは、吉田松陰の甥である楫取道明でした。彼らは、赴任して半年後の明治 29 年元旦、当地の匪賊の襲撃を受けます。このとき、「身に寸鉄を帯びていては教育は成り立たない」との信念のもと、困難な教育の普及に打開の道を模索していた彼らは、匪賊を相手に説得を試みようとします。暴動の勃発に際し、住民が避難を勧めましたが、「死して余栄あり、実に死に甲斐あり」と言い残し、全員が惨殺されてしまいます。

このことは、日本人が台湾の教育に命を賭して取り組んでいることを示した象徴的な事件として後々まで語り継がれ、その後の台湾教育が劇的に進展していく基となったのでした。

このことを意識していたかどうかは分かりませんが、志賀先生が渡台したのは、この年の暮れでした。

台湾総督府の教育政策

台湾総督府は、明治29年、台湾の14の主要都市に国語伝習所を設置。明治31年8月、国語伝習所に代わって公学校が開設され、台湾人子弟の教育が本格化していきます。台北には国語学校（中等教育の国語部と教員養成の師範部の二部構成）が設けられ、明治32年に台湾医学校が設けられたほか、各地に中学校、高等学校、職業学校が次々に開校し、昭和三年には台北帝国大学も設立され、内地の上級学校への進学や外国留学の道も開かれていきます。児童の就学率は、当初1%にも満たない状況でしたが、昭和19年には93%となり、日本統治時代の50年の間に台湾の教育水準は世界のトップレベルにまで到達したのでした。

しかし、台湾総督府の民生局長を務めた後藤新平が「教育は諸刃（もろは）の剣」と心配したように、台湾の教育レベルが向上するにつれて民族意識が高まり、それはやがて独立運動に発展していくこととなります。

慈父の如く

志賀先生は、渡台後、数年を経て、当時の台湾の中心地であった台中に赴き、大甲公学校の雇の教員となります。そして、以後26年間、輝かしい過去の一切を封印して、一介の雇い教員のまま務め続けました。

志賀先生が渡台した当初の台湾には教育の概念すらなく、先生は、就学適齢期の子供を持つ台湾人の家々に教育の重要性を説いて回りました。

古ぼけた文昌廟（ぶんしょうびょう）（学問の神様を祀るお宮）を活用して開校した大甲公学校は、1学年4名からスタートしましたが、志賀先生らの地道な努力により、次第に生徒数が増えて10年後には新校舎もでき、大正期に入ると数百名を数えるまでになり、大甲公学校の就学率と進学率は、台湾全土で群を抜く高さとなりました。

志賀先生の教育姿勢は、厳しくも慈愛に満ちたものであったようです。貧しい家庭の子には文具を与え、学資を援助し、病気の子があれば見舞い、けがをして歩くことができない子があれば歩けるようになるまで背に負って学校に通わせたと伝えられています。

志賀先生は、大臣になれたかもしれない人材でしたが、台湾では、一切、そのような素振りを見せませんでした。先生が誰に対しても腰を折って丁寧に挨拶をすることを知っている幼い子供達がからかうように四方八方から礼をすると、先生はそのつど生真面目（きまじめ）にお辞儀をし、面白がる子供達と一緒に笑っていたそうです。

字の書き方を教えるときは背後から子供を抱き抱えるようにして手を取って教え、常々、守るべき時間の観念を説き、王陽明の言葉を語っては人としてのあり方をさとしました。

教え子達が師範学校を卒業して母校に戻り、雇いの教員である志賀先生の上席に座するようになっても、先生は一向に気にする様子はなかったといいます。学問のできる子には上級の学校への進学を勧め、努めて内地や海外の大学への留学を斡旋しました。

このようにして育てられた1,000人余りの教え子達は、やがて台湾の中枢を担う人材となって台湾社会の発展に貢献していくのですが、彼らは、帰省する折々、その慈父の如き恩師を訪ねることを忘れませんでした。子供達がどんなに学問を深め、社会的に重要な地位を占めるようになっても、志賀先生の見識を超えることは、決して簡単なことではなかったでしょう。

教え子達が一人前の大人となって志賀先生と酒を酌み交わしながら議論をするとき、その話題は、多分、台湾の新国家建設を廻る夢溢れるものだったに違いありません。

総督府との軋轢（あつれき）

日本の統治が進められていく中で、台湾の住民は、慣れない制度に戸惑い、反発を示すことも多かったようです。法律に詳しい志賀先生は、住民と官憲と

の仲介役となってトラブルの解消に努めました。ともすれば台湾人に対して優越的な言動をしがちな日本人が多かった中で、志賀先生は少しも差別することなく人々に接し、同じ人間としての対等な姿勢を貫きました。

志賀先生が大甲公学校に赴任した翌年の明治33年から漢学廃止論争が始まりました。その翌年、新聞「台湾日日新報」でも漢文紙面は８面から２面に減少しました。大正２年には、総督府が漢訳文廃止を告示。民族平等、相互尊重を主張する志賀先生は、総督府の政策に異議を唱へ、漢学教育にも力を注ぎました。台湾人の伝統文化を軽視してはならないとする先生の崇高な教育精神は、当時の台湾人社会に高く評価されるところとなりましたが、先生自身は、理想と現実の間で悩ましい日々を送っていました。

大正 10 年、台湾文化協会が発足すると、志賀先生は、教え子達にその運動の支援を奨励し、台湾の固有文化の護持を示唆しました。この頃、日本語の普及（共通語化）に伴い、台湾教育令が改定され、公学校の教科書から漢文は完全に排除されました。

終焉（しゅうえん）

総督府との軋轢が深まる中で、志賀先生はついに教壇から引きずり下ろされることとなります。先生の勤続 25 周年の祝賀会の直前に起きたトラブルを契機に、校長は、先生に学校農園の管理の職を命じました。

志賀先生にとって教職の道を断たれることは、死を意味するものでした。

祝賀会の 1 週間後、先生は学校近くの遊泳池に身を投げ、命を絶ちました。

先生の死は、大甲の人々にとって大事件でした。心の支えを失った街の人々は途方に暮れ、教え子達は慈父を失った突然の不幸を嘆きました。家族のない先生の葬儀は、教え子達によって執り行われ、壮年の教え子達は、先を争って自ら設けた遺族席に座し、恩師との別れに悲痛の涙を流したのでした。台湾文化協会のリーダーとなっていた教え子、呉淮水（ごわいすい）が声涙下る弔辞を読むとき、1,000 人余りの参列者は、皆、嗚咽（おえつ）し、声を上げて哭きました。

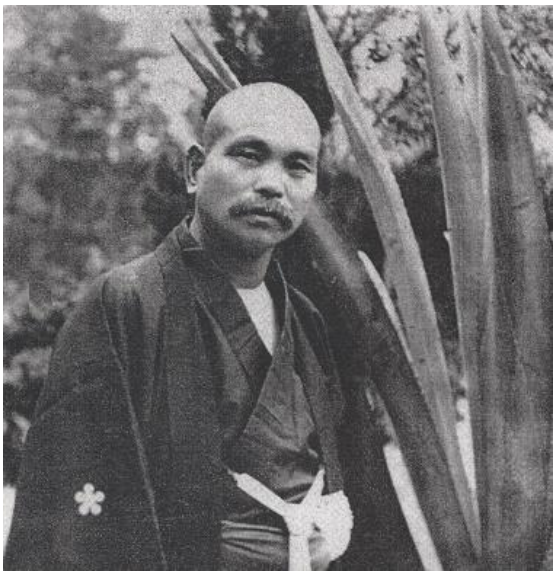
葬儀の後、志賀先生の遺体は、鄭成功（ていせいこう）（台湾随一の英雄）ゆかりの鐵砧山の南麓に葬られました。呉淮水が先導する葬儀の列は延々と 1km も続き、道々には供えものが置かれ、爆竹が鳴らされました。それは、神様の行列を奉送する路香祭そのものであり、前代未聞のできごとでした。

おわりに

志賀哲太郎先生は、生前から、その崇高な生き方が台湾の人々に受け容れられ、いつしか「大甲の聖人」と呼ばれるようになっていきました。そして、死後 100 年になろうとする今日においてもなお、台湾では深く敬愛され続けています。

先生が実践し、子供達にも説いた「慈悲」（おもいやり）「節倹」（ひかえめ）「謙虚」（つつましさ）の３つの信条が、「無私無欲」「平等博愛」の言動となって体現されていた結果と言えるでしょう。

わが国では無名に近いこの「聖人」の足跡は、現代社会に生きる私達をも粛然とさせ、同時に勇気と誇りを与えてくれます。それは、将来を担う子どもたちにもきっと伝わっていくものであろうと信じます。



志賀哲太郎先生

■ 大甲の聖人　志賀哲太郎先生　（その２）

折 田 豊 生　（本会事務局長）

はじめに

志賀先生は、若き日に郷土の有志、佐々友房や古荘嘉門、安達謙蔵らとともに政治活動に明け暮れ、政界の三闘士の一人と目された人物であり、そのままの道を歩めば、或いは大臣になれたかもしれない逸材でした。

しかし、先生は、いつしか政界を離れ、教育の道を志すこととなります。しかも、教師としても栄達を求めず、諌死に至るまでの大甲における半生を一介の雇（やとい）の教師として、黙々と植民地台湾の子供達の育成に努めました。

先生をしてその熱意を抱かしめたものは、一体、何だったのでしょうか。

伝説の人

志賀先生は、ジャーナリストであったにも拘らず、自らについて書き残したものが全く見当たりません。

昭和 49 年に刊行されたそれまでの唯一の伝記「台湾大甲の聖人　志賀哲太郎傳」（桑野豊助著）と台湾の研究者張慶宗氏の「日本時代的大甲」、また、それらを足掛かりとして熊本県の郷土史家増田隆策氏が国会図書館や台湾大学の諸資料を渉猟して纏め上げた「志賀哲太郎資料集」（志賀哲太郎顕彰会発行）及び「志賀哲太郎とその時代」（同前）を頼りにその足跡を辿るほかはないのですが、それらの根拠は殆どが役所の事務記録や伝聞、教え子達の思い出話、時代背景等ですから、この論考も群盲象を評する類になりかねないことを承知で進めざるを得ません。

先生は、畢竟（ひっきょう）、語り継がれるべくして語り継がれた、伝説の偉人なのです。

井上毅（こわし）の影響

増田隆策氏は、志賀先生が教育に目を向けるようになった最初の動機は、明治 23 年に発布された教育勅語であり、更に、その志を決定付けたのは、明治 26 年に文部大臣となった井上毅の言動ではないかと言います。

明治 10 年、明治天皇の教育現場御視察を受けて侍講元田永孚（ながざね）により儒学道徳を規範とする「教学聖旨」が起草され、また一方では、政府の性急な欧化主義を批判する地方長官会議の建議を踏まえ、芳川顕正文部大臣の命を受け、女子高等師範学校長中村正直により「教育勅語」の原案が作成されます。

内閣法制局長官の職にあった井上毅は、「教学聖旨」については儒学的価値観が近代教育の障害になることを懸念し、また、中村の「勅語」原案についてはそのキリスト教的表現の多い不適切さを指摘し、首相山縣有朋の要請もあって、自ら勅語の私案を作成することとなります。

「勅語」は宗教や特定の思想、学術に偏ってはならず、国民が直に天皇のお言葉として受け止めるべきものであると考えていた井上は、「教学聖旨」について論争を繰り返していた同郷の先輩元田永孚を説き伏せることに専念します。その背景には、欧米列強の植民地化を回避すべき富国強兵のための欧化政策と伝統文化を踏まえた教育方針の確立といふ難題を両立させる必要があったのです。

西欧では、18 世紀後半の産業革命以降、貧富の差や階級格差を背景として社会主義思想に基づく社会運動が顕在化し、1789 年に勃発したフランス革命の後、様々な革命思想が登場します。マルクスの「資本論」第 1～3 部がエンゲルスによって刊行されるのは 1867 年（明治元年）から 1894 年（明治 27 年）にかけてですが、我が国の文明開化は、先進的な学術流入と併せて、国のあり方に歪（ひず）みの種をもたらすものでもありました。

そのような状況の中で、国民道徳の規範となる「教育勅語」は、難産の末、漸く日の目を見ること

となりますが、それは権力的な法令としてではなく、井上の望みどおり「天皇のお言葉」として渙発されました。そこには、国民各々の思想信条を尊重する井上の濃やかな配慮があったと言われています。

志賀先生が井上と直接交流した記録はありませんが、先生が親しく接した古荘嘉門は、熊本の儒学者木下韡村の塾において井上とともに学び合った仲であり、両者は井上の死まで深く親交を結びましたから、表立った言動に限らず、井上の内なる思いは古荘を通じて、随時、先生にも伝わっていたであろうと思われます。

井上毅は、明治 26 年、第 2 次伊藤博文内閣の文部大臣に就任します。結核の悪化等により、任期は僅か 1 年半に過ぎませんでしたが、その間、産業教育振興、義務教育振興、女子教育制度の強化、大学管理制度改革等、多岐に亘って国力増強のための総合的な教育制度の整備が図られたのでした。

井上は、明治 27 年 8 月に官を辞し、翌年 3 月に 51 歳で没しました。国政の中枢にあって奮闘し、精魂を使い果たして他界した井上の最期の姿は、正に骨と皮であったと言われています。

国家の重大事に身命を擲って斃れた井上の生き様を、同郷の後輩として先生はどのように見ておられたのでしょうか。

明治天皇御製の影響

現在の歌会始めの儀は、古くは宮中行事の「歌御会」の年始行事として鎌倉時代中期に定着していたと言われます。明治 7 年に一般国民の詠進が認められ、後に御製を始め選歌のすべてが新聞でも発表されるようになり、国民的行事として定着していきます。

明治天皇御集を国民が初めて目にしたのは大正元年で、戦前においてだけでも 18 社が次々に御集を刊行しています。文部省も、「此の御集は、明治天皇の御聖徳を仰ぎ、御仁慈の大御心を偲び奉るに最も適当なるのみならず、又実に国民にとりて修養の鑑たるべく、教育上にも極めて有益なるを以て、宮内大臣と協議の上」として、関係機関に頒布しました。

明治天皇は、「しきしまの道」として、短歌による修練の意義を尊重し実践され、そのご生涯において 9 万余首にのぼる御製を残しておられます。

その中から教育教化に関するものを拾い上げてみると、次のようなお歌があります。

夏草のしげきをみればあらたよにいまだひらけぬ道もありけり（明治 29 年）
わたつみのほかまでにほへ國の風ふきそふ秋のしらぎくの花（明治 29 年）
まことをもてわがしたしまばとつくにの人も心をへだてざらまし（明治 38 年）
えぞのおく南の島のはてまでもおひしげらせよわがをしへ草（明治 38 年）
朝夕にまもり育つるをしへ子は生みの子のごとかなしかるらむ（明治 39 年）
よきをとりあしきをすてて外國におとらぬくにとなすよしもがな（明治 42 年）
新高の山よりおくにいつの日かうつしうゑましわがをしへ草（明治 43 年）
（※新高山＝台湾の玉山。富士山より高く、こう呼ばれた。）

台湾において、朝毎に東方遥拝を欠かさなかったと言われる志賀先生が、明治天皇の御製に親しんでいたであろうことは、想像に難くありません。

先生は台湾においても、老若男女を問わず一視同仁の姿勢を貫いたと言われていますが、仏教や儒教の影響もさることながら、そこに往時の国民的精神に沿って生きようとした「明治人志賀」の姿が透けて見えるように思われるのです。

先生の献身的な努力により、赴任地である大甲の教育レベルは台湾全土でも群を抜く高さとなりました。

しかし、日本語が台湾の共通語として定着していく中で、台湾総督府は次第に漢学教育の比重を減らし、終には全廃としました。台湾には台湾の文化と歴史があり、それを尊重すべきであるとして総督府

の教育方針に抵抗した先生の思いの根底には、異民族であっても同胞と斉しく愛情と敬意を以て接するべきであるとした明治天皇の御精神を「拳拳服膺」して務めなければならないとの信念があったであろうと思われてなりません。

金子政吉校長の支援

金子政吉は、志賀先生が初めて赴任した大甲公学校の校長です。茨城県の出身で志賀と同じく台湾領有後間もない明治 29 年に渡台しました。総督府国語学校で学び、翌年助教諭に、翌々年に教諭となり、明治 31 年 10 月、大甲公学校開設と同時に校長となりました。

先生より５歳年下でしたが、互いに相性がよく、二人は肝胆相照らす仲となり、熱意を持って就学率の向上に努め、台湾人子弟の教育に当たりました。教育は威圧であってはならないとして、官服と短剣を忌避し、和服を愛用した点も良く似ていました。

金子は、17 年の後、あるトラブルにより管理責任を問われて大甲公学校長の職を辞するのですが、植民地政策が試行錯誤される混迷期にあって、当初から、先生と共に大甲街民から深い信頼を寄せられていました。

金子は、昭和３年、台湾教育誌に志賀に関する回顧談を寄稿していますが、その中に次のような言葉があります。

「～上御一人に対して相済まず～地方の一教員が上御一人に対して責任を感ずる。これが死を選んだ先生の肺腑より出た真剣の言葉なのである。」「一別十有余年の私が当年を偲びつつペンを走らす間にも独りで眼瞼の潤むを覚ゆるのであるから永き間朝夕を共にした父兄や子弟達が氏の口水（※入水自殺）を聞き驚顛し天に哭し地に慟きたるべきは想像に難くない。」

昭和４年、金子は脳溢血で倒れ 55 歳で没しました。10 年後、大甲公学校の卒業生らにより校内に巨大な顕彰碑が建立されましたが、戦後、取り壊されて今はありません。

金子は台湾における先生の最も深い理解者であり、庇護者であり、同志でもありました。金子が校長でなかったならば、先生の活躍は半減したに違いありません。

おわりに

志賀先生は、井上毅や金子政吉と同じく、典型的な明治人の一人でした。国家の命運と栄誉を自らのそれとし、己の社会的使命を悟り、世俗的な栄達を度外視しました。

新天地台湾において、金子とその信条を共有して教育に打ち込むことのできた 15 年間は、先生にとって最も幸福な日々だったでありましょう。

先生の教育方針は、残念ながら、総督府の役人達には、必ずしも理解して貰えるものではありませんでした。

しかし、先生の足跡を辿れば、そこに、一人のあるべき日本人として誠実に生きようとした姿が如実に現れます。

自決に際し、遺書に認めたと言われる「上御一人に対して相済まず」との短い一言は、一連の経緯における先生の心情を想はせて余りあるものです。

遠い台湾の一隅にあって明治人としての理想的な生き方を貫いた一人の日本人が今なお密かな光芒を放っていることに、深甚なる敬意を捧げたいと思います。

志賀哲太郎先生

■　志賀哲太郎先生生誕地顕彰碑建立 ご賛助者 芳名録

本会のこのたびの企画にご賛助頂きました多くの皆様のご芳志、まことに有難うございました。
ここにご芳名を掲げ、永く感謝の意を表します。
なお、敬称は省略させて頂き、原則として 50 音順で掲載させて頂きました。
また、お住まいの場所として、県内の皆様につきましては市町村名を、県外の皆様につきましては都道府県名を付記いたしました。

【個人の皆様】

（五十音順）

市村克己　（益城町）
市村恵子　（益城町）
岩本清嗣　（宇土市）
岩本千江子（益城町）
植山洋一　（益城町）
宇土幸寿　（益城町）
宇土　亮　（益城町）
宇土凛太朗（益城町）
折田豊生　（益城町）
五嶋和明　（宇城市）
坂田真也　（益城町）
坂田敏明　（益城町）
坂田知則　（益城町）
澤田寛旨　（八代市）
下田信子　（益城町）
白濱　裕　（熊本市）
城下克浩　（益城町）
髙橋秋壽　（益城町）
滝川朋子　（益城町）
建川敬晴　（熊本市）
田上智恵　（熊本市）
徳永　博　（熊本市）
富澤堅仁　（益城町）
永田博幸　（益城町）
永田　誠　（熊本市）
中園聡美　（熊本市）
中園幹也　（熊本市）
中野喜代子（益城町）
中村慎一　（益城町）
中村千歳　（益城町）
中村康弘　（益城町）
野田正和　（益城町）
野元政司　（熊本市）
林　ヒロ子（大津町）
廣瀬　勝　（小国町）
廣田律男　（益城町）
藤門豊明　（八代市）
外口榮一　（熊本市）
外口キヨ子（熊本市）
堀田　清　（益城町）
本田和子　（熊本市）
増田隆策　（熊本市）
松永ひとみ（玉東町）
松野陽子　（益城町）
道田俊郎　（熊本市）
宮本睦士　（益城町）
村上　徹　（益城町）
森本正敏　（益城町）
山内智央　（岡山県）
山内英敏　（益城町）
吉住洋三　（熊本市）
吉田鶴千代（益城町）
吉本達雄　（広島県）
渡邉　博　（益城町）

【法人の皆様】

（五十音順）

㈱石結　（熊本市）
宇土自動車整備工場
（益城町）
㈱お茶の富澤
（益城町）
御料理「実乃花」
（西原村）
㈲カープラザ・ムサシ
（熊本市）
ヒロコーポレーション
合同会社（泗水町）
農業法人㈱ベジタ
（熊本市）
豊礼の湯　（小国町）
㈲益城管工（益城町）

（9/24 起工式）

志賀哲太郎先生生誕地顕彰碑建立地

生誕地顕彰碑 ■印 （益城町田原 330 番地 中村邸前 志賀家菩提寺「浄信寺」の西隣）

■ 志賀哲太郎先生生誕の地顕彰碑の施工にあたって

原　　明 宏　（株式会社石結　代表取締役社長）

「大甲の聖人」として今も台湾の人々に慕われている志賀哲太郎先生のことを、私はほとんど知りませんでした。

今回、ご生家跡の前に「生誕の地顕彰碑」を建てさせていただく施工のご縁に恵まれ、事務局の折田様から冊子をたまわりました。その冊子を日々読ませていただいて、初めてどのような方であられたかを知ることができ、大変感動致しました。

「剣を吊っていては教育は行えない。子供の知能を啓発し育てるにあたって、役人根性を以てこれを律することは教育の道に反する」との信念で、その気になれば出来た任官を固辞して、台湾の方々の教育のため一生を捧げられました。

亡くなられたのちも、かつての教え子の方々に慕われ守られて、やがて百年になろうとする今日においても、その子孫の方々や多くの台湾の人々に敬われておられます。

このような素晴らしい方の顕彰碑建立の仕事をさせていただいたことは、私にとっても誇りです。

得がたい機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

（事務局付記）

原社長は、若い頃から歴史や伝統文化に深い関心を持っておられたようです。日頃、その特技を活かして、熊本の偉人の墓石や碑石の補修をされるなど、稀有なボランティア活動をしておられます。

以前、友人からそのようなことやお人柄についてお聞きし、何度かお目にかかって知遇を得ておりましたので、今春、志賀先生の生誕地顕彰碑の建立について相談させていただきました。

今回の顕彰碑建立の趣旨を説明し、本会がこれまで発行した会誌等を差し上げたところ、実に丁寧に読んで下さり、顕彰碑建立の工事についてご快諾をいただきました。しかも、格段の破格値でお引き受け下さり、恐縮した次第でした。

コロナ感染症の影響で、企画の推進に長時間を要しましたが、早期の資材の手配から設計の見直し、加工、施工時期の調整まで、何度も貴重なアドバイスをいただきました。

原社長との出会いなくして、この顕彰碑の建立はあり得なかったと思います。

この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

原社長と社員の下園さん。9/26 竣工。
酷暑の中、本当にお疲れ様でした。

◆　ご協賛まことにありがとうございます　◆

しみじみと味わうハイクオリティーな暮らし

シルバーハウス煌ら（きらら）

元気～安心～快適～煌らライフ！

閑静な住宅街にあるさわやかな住まい
木の温かみに包まれたゆとりの空間
職員のやさしい心づかい（24 時間常駐）

「煌ら」の食事はすべて手づくり

医食同源の考えによる食生活
⇒ 健康長寿の秘訣です！
バランスの取れたおいしい食事
⇒ 病気を予防し治療する力です！

傘寿、米寿など、節目のお祝いにも専属の板前が腕をふるいます。

住宅型有料老人ホーム　シルバーハウス煌ら（きらら）
木造1階建 28 室（2 人部屋は 3 室）

ヒロコーポレーション　合同会社
☎ 0968-36-9066
〒861-1204 菊池市泗水町永 3193

お茶の富澤

創業 90 年 伝統の匠のわざ
が育んだこだわりの逸品を
お茶の間にお届けします！

株式会社お茶の富澤
益城町小谷 102
電話　096-286-2231

ご相談ください！
新車・中古車販売　車検
修理 自動車保険など

㈲ カープラザ・ムサシ

代表取締役　竹 部 隆 春

熊本市東区栄町４－９
☎ 0066-9709-3749

豊礼の湯

ホワイトブルーの
にごり湯につかり
山の静けさを聴く

涌蓋山を眺めながら‥

コインタイマー式貸切風呂（桧造・石造・露天）

定休日なし　家族風呂 24 時間　大浴場等 8～20 時
簡易宿泊施設「豊礼の宿」併設　駐車場 70 台

小国町西里 2917　☎ 0967-46-5525

カット野菜・真空低温調理

農業法人株式会社ベジタ

VEGETA　代表取締役　外 口 榮 一

本社　熊本市西区蓮台寺 1-2-31
工場　熊本市西区田崎町 484 A-1
熊本地方卸売市場内

TEL.096-355-0660
FAX.096-359-5240
E-mail：youkosou@festa.ocn.ne.jp

おまかせください！

自動車修理・整備・鈑金・塗装　自動車販売　車検サービス

宇土自動車整備工場　代表者　宇 土 幸 寿

益城町大字小谷253－1　TEL. 096－286－1470

墓石や記念碑の設計施工・石材再生・金箔施工・石彫刻（墓石や表札）

ISHIYUI　人と石を結ぶ　**石結**

お墓や記念碑のこと
何でもご相談ください。

納得の内容とリーズナブルな費用

先ずはお電話かお問い合わせフォームよりお尋ねください！

㈱石結　代表取締役　原　明 宏

〒861-8031　熊本市東区戸島町 931
FD.0120-01-6321　TEL.096-234-6321　FAX.096-234-6322
E-mail：isiyui2014@gmail.com　URL：http://isiyui.com

土木・とび土工・舗装・しゅんせつ
水道施設・管の各工事

有限会社 益 城 管 工

代表・取締役　坂 田 知 則

復興！発展！充実！

〒861-2202　益城町田原 292
☎ 096-286-5503
何でもご相談ください!!

御食事・宴会・和風料理

うまい！安心！自家栽培野菜

味の花咲く　**実乃花**

代表取締役　城下克浩

西原村小森 3590-6
TEL/FAX 096-279-2100

■ 会員募集

会員を募集しています。
歴史の好きな方、大歓迎です。ただし、本会は、個人的な研究発表や学習の場ではありません。また、政治的・思想的・宗教的活動もできません。
本会の活動は、志賀哲太郎に関係する教育・文化・産業振興及び地域・国際交流を目的としたボランティア活動です。多くの皆様の善意のご協力をお願いいたします。

◇正会員
・会の運営に参加し、発行物の提供を受けることができます。
・運営会議に参加していただきます。（できる範囲で結構です。）

◇賛助会員
・会の活動を側面から任意にサポートしていただきます。
・会の活動状況の報告、発行物の提供を受けることができます。

◇協力会員
・広報など、近隣の会員の活動を臨時にサポートしていただきます。
・臨時に発行物の提供を受けることができます。

【志賀哲太郎顕彰会の歩み】

H27.09.06	発足（会長:松野國策=熊本県文化功労者・熊本歴史学研究会会長）
	月例会議において事業内容と諸課題を検討
H28.02.26-29	代表者 7 名が台湾台中市大甲区を訪問
	（大甲区長表敬訪問・志賀哲太郎墓前祭催行・資料調査等）
H28.04.14	熊本大震災により活動中断
	(5/28 開催予定の志賀哲太郎先生顕彰のつどいは平成 30 年に延期)
H28.08.07	臨時会議
H28.11.16	月例会議再開
H28.12.29	松野國策会長逝去（※志賀哲太郎先生の命日と同日）
H29.01.14	新会長選任（宮本睦士=益城町教育委員・文化財保護委員・益城の歴史遺産を守る会会長）
H29.02-	県内各地で志賀哲太郎パネル展を巡回開催
H29.03.05	益城町保健福祉センターで「志賀哲太郎研修会」(約 100 人)開催
H29.03	「志賀哲太郎小傳」刊行
H29.03-	県内各地でミニ講演会・研修会を実施
H29.03-	台湾台中市大甲國民小學と益城町立津森小学校との学校交流を支援
H29.05	インターネットにホームページを開設
H29.11.16-19	代表者 12 名が台湾台中市大甲区を訪問(墓参・交流・調査・研修等)
H29.12.10	くまもと県民交流館パレア(熊本市)で日台交流会(約 100 人)開催
H29.12	「志賀哲太郎資料集」刊行
H30.02.25	益城町文化会館で志賀哲太郎先生顕彰のつどい(約 400 人)開催
	日台友好交流会(約 100 人)を開催＝台湾台中市大甲区から 10 名来訪
H30.12.16	益城町保健福祉センターで「李久惟先生講演会」(約 100 人)開催
H31.02	「志賀哲太郎とその時代」刊行
H31.09.29	熊本市中央公民館で「志賀哲太郎とその時代」出版記念講演会(約 50 人)開催
R02.12	志賀哲太郎先生顕彰碑建立
R03.11	志賀哲太郎先生生誕の地顕彰碑建立

■ 志賀哲太郎顕彰会　http://shigatetsutarou.cloud-line.com

事務局　〒861-2232　熊本県上益城郡益城町馬水 848-10　折田方
TEL090-8399-4854　E-mail: olita@lep.bbiq.jp